

日が来、早朝五時ごろ、全員武装して広場に集合し、隊長の号令で東方を向いて、帯刀者は抜刀、執銃者は着剣、天皇の軍隊として最後の東方遥拝を行う。

「本日天皇陛下の命に依り米軍に対し、武装解除することになった。しかし我が虎兵団は戦争に敗れたのではない。最後の一兵になるまで、また玉碎するまでもと頑張ってきた。隊長始め全員そのように信じている事間違いはない。そうでなければ戦死なされた戦友がかばれぬではないか……」。

最後に隊長の号令で、万歳三唱があり式は終了しました。白旗を先頭にして山を下り、キャンプに入るのであります。

ソロモン諸島コロロンバンガラ島 生き残りの強運

高知県 佐々木 重利

昭和十七年九月、旧久礼町・須崎町・半山村の若者と共に須崎小学校で徴兵検査がありました。禪一枚で軍医の前へ直立不動の姿勢で立ち検査を受け、私は久礼町五十六名の中で三人の甲種合格者の一名となりました。その晩は伊屋の森田さんの所で五十銭会費で随分にごやかにお祝いをし、約一カ月後に各自の兵料と入隊日時の通達がありました。私は全く予想外の海軍という事です。

「昭和十八年一月十日、佐世保相ノ浦海兵団に入隊すべし」との命令書を受け取りました。当時は既に帝国海軍の精鋭も相当の痛手を受けていた時期だけに、海軍の水兵に選ばれたことは私にとり無常の喜びでありました。

一月八日、小雪の舞う寒い朝、沢山の方々のお見送りをいただき、駅前の広場でお別れの挨拶で、「いよいよ皆様とはこれが最後です。二度とこの故郷に生還することはないでしょう。海軍軍人の一員として立派にご奉公いたしますので、皆様も健康にくれぐれも御注意なされ、ますます銃後の守りを強固にしてください」と申し上げ、懐かしの故郷を後に列車に乗り込みました。

一月十日朝、相ノ浦海兵団練兵場には人団者が各県ごとに整列、海兵団長南雲忠一少将の訓辞の後、各兵科ごとに分隊へ。私は第十八分隊江頭団七中尉の指揮下で第八班一等兵曹荒木久助教班長にお世話になることとなりました。軍服に着替えると、「ただ今よりお前たちは娑婆の人間ではない。帝国海軍軍人である。何事もきびきびした動作で、まごまごしていると容赦しないぞ。エーカ」「ハイ！」これからいよいよ軍隊生活であります。

何もかも全く未知の世界。忙しいことこの上ありません。毎日教科が違う、私には十分覚える時間がない。

その日の日課が終わり、消灯、就寝。ハンモックの中で今日一日の復習をするが、精神的にも疲れているのでいつの間にか眠っている。こんなことを繰り返しつつ三カ月半の基礎教育も無事終了し、晴れて海軍一等水兵になりました。

次に各自の転属先です。私は内地に残ると制裁がひどいので第一線戦場をと希望を持っていたのです。数日後第一線希望の募集があり、どこの一線に行くかも全然不明のまま挙手しました。このとき、分隊で十五名が選ばれました。ところが後で班長が涙を流しながら、「お前たちはこの戦場へ行ったら生還できない。最も危険な戦場なのだ」と言われました。これが最後かと思うと哀れと思われたのでしょうか。

当時の教育は第一線で華々しく散ってこそ軍人の本懐とされていたので私は何の抵抗もありませんでした。早速転勤準備、陸路横須賀海兵団に転属。数日後「冬服は一切返納すべし」と言われて南方行きは見当がついたので、それ以外のことは不明です。

出港の日、港には輸送船団五隻が待機している。乗

船、出港、特に軍港の出入口は危険とのことで、駆逐艦や駆潜艇等数隻が船団護衛についていました。これで日本ともお別れだと思ふと何んとなく寂しいが、涙は流れません。八丈島を左に見ながら船団は蛇行しつつ南へ進む。昼は中央マストの上に登り交代で、敵潜水艦の発見、魚雷の航跡の見張りが我々の任務であります。しかし、便乗であるからこれという勤務はないので非番の時は甲板に出て見るのですが、ただ大海原で島も陸地も見えません。

数日後の夜、船内から俄かに「配置につけ、爆雷用意」の号令。只事ではない、敵潜水艦接近らしい。続いて爆雷投下。ズシン、ズシンと海中で爆破する不気味な音。護衛艦は我々船団を守り、後になり先になり警戒しているだろうが、夜の見張りは不能、電探で探知、爆雷投下により敵潜水艦を退散させるのが任務です。夜は明けたが果てしない大海原を今日も南へ進んでいる。やがてまた、「配置に付け」の号令。しかし、そのとき先頭の輸送船に魚雷が命中し、船尾から青々とした海へ引き込まれるように姿を消しました。決し

て他人事ではない。いつ、どこで我々の船も狙われるかもしれない。不安と恐怖の中に航行を続けたのですが、数日後やつと島が見えました。

この島こそトラック島とのこと、接近して驚きました。山のような軍艦が停泊している。今まで日本にこんな強大な軍艦があることは全く知りませんでした。これが連合艦隊の旗艦「大和」とのこと、こんな巨艦が健在で活躍中だから、まだまだ日本海軍は戦えると感じました。

このトラック島は夏島・秋島・冬島・春島と大きな島が四つ、他は小さな島であります。我々は秋春に仮上陸しましたが、やはり南方は暑い。二日休養して出港しましたが、私たちにはいまだに目的地は知らされていない。私たちは佐世保の兵隊でありながら横須賀の部隊に混合されたので、借りてきた猫のようにしてないと恐ろしいという。所轄が違ふと犬と猫のように仲が悪い。階級が下だと直ちにバツター制裁。何か悪いことをしたとか理由があるなら仕方ないが、気合が抜けているからと言って叩かれては哀れという

しかありません。ですから目的地など聞くことはできないのです。

トラック島を出港して数日後、今度は湾口は狭いが奥へ奥へと随分広く長い港に投錨しました。聞けばここが有名なニューギニア・ビスマルク諸島「ラバウル」でした。大小無数の船が停泊しており、私たちはここで下船。長い航海もやっと終わり一段落です。大型トラックが次々と我々を運びにきました。今度はどこに移動するのか、これも全く行く先不明です。数分走って下車、目下ここで待機ということでしたが、佐世保の兵隊が相当いることが知らされました。

松島という所で翌日から陸戦教育が始まりました。島が小さいので一週して四キロ。住民も相当おり、午前と午後各一回一周しながら教育を受けます。軽機関銃の操法と手榴弾の投げ方など、毎日同じことをしばらく教えられました。その中にいよいよ来たるべき日が来ました。ここより南方は制海空権は敵の手中にあり、輸送船では危険だから目的地まで一晩で突っ走る駆逐艦に乗艦。この時、横須賀の兵長が私を見送りに

来てくれ、小声で「佐々木必ず帰って来いよ、俺は年だからここに残る。待っているぞ」と言ってくれました。所轄が違ってもこんなに立派な優しい先輩もいると思うと有り難く日頭が熱くなりました。

再会を期してお別れをし、艦は猛スピードで突っ走る。早い早い四〇ノットくらいの速力だそうでした。朝方、大きな島の前に停泊、ブーゲンビル島ブインと言う島だそうです。この飛行場は前線視察を終え、着陸寸前に戦死をされた山本五十六大将の怨みの島です。油断は禁物というので早く上陸しましたが、ここにも佐世保の兵隊が多くなりました。

私たちは本艦より降りましたが、入れ替わって陸軍の兵隊が五百名ほど乗艦、直ちに出海しました。行く先は我々には不明でしたが、二、三日後の情報では目的地にて揚陸作戦中に敵機の攻撃を受け轟沈したとのことでした。これ以来、沢山の兵員を輸送することは至って危険で被害が大きいうことになり、私たちの三度目の出港は小さな漁船に分乗、十隻ぐらいの漁船で兵と食糧を運ぶこととなりました。

一隻に二十名ぐらゐの兵が各自小銃を持ち、護衛兵二名、軽機関銃一挺据え付けのお粗末な装備です。制海空権を完全に連合軍に握られた南海の前線へ出て行くとは全く無謀の一語に尽きるといふことで、夜間、島から島へと寄港しながらの航行でした。

ペララペラ島、チオイセル島、ショートランド島への上陸のときは、真つ暗闇の航海中突然爆音と同時に照明弾を投下され、たちまち昼間のように明るくなりました。後方を見れば敵の魚雷艇が機銃を乱射しながら接近して来る。機銃は二五ミリということを知っていました。それに加えて速力が早い。我々漁船団は必死に応戦しました。幸いに飛行機の爆撃がなくてよかったです。魚雷艇も一隻なので危険を感じたのか余り深追いしなかつたので助かりました。私も初めての戦争体験で随分長く戦つたように思いましたが、十分か十五分ぐらゐであつたのでしよう。

その日の未明やつと目的地に着き、私たちは自分の携帯品を持って下船上陸。平田中尉の第五中隊指揮下に配属されました。この島はコロンバンガラ島という

無人島ですが、その時は日本軍が二万三千名いるとのことで、この中隊は全員佐世保の兵隊であることを聞かされました。小隊も決まり、兵舎はテント張りでした。

先遣隊は私たちより三カ月早く来て各々が陣地構築等をされており、我々が直ちに戦闘に参加することが可能でした。すると、まったく見ず知らずの先輩が「お前は久礼の佐々木ではないか」と聞く。「ハイ」と答えると、「俺は窪川の東又じゃ、お前は青年学校の相撲で仁井田へ度々来たろうが」と言われ本当に驚きました。まさか、ここに私を知つた人がいるとは夢のようで、私は知らなくても先輩が覚えていてくれたことに有り難く感じました。後でお話を聞けば吉田寛という方で、八カ町村の体育大会に数年参加したことがあるので記憶にあるとのことでした。奇しき縁とはこのことでしょう。

私の配置も決まり、四十ミリ連双高射機関砲の弾薬装填手で、弾装の中には五十発の弾が積められているので、一人では絶対持ち上げることができない重量で

ある。二人で掛け声を合わせて持ち上げ、車をレールに乗せると、自動的にペダルを踏めば発射できるようになっています。一度操作を習ったが、果たして実践では上手にできるだろうかと不安でした。

この陣地には四〇ミリ、二五ミリ、一三ミリの機銃が随分多く据え付けられていましたが、私は暮舎（兵舎）の一段上の陣地でした。いよいよ戦闘です。「対空戦闘配置に着け」のラッパの響き、鉄帽を被り配置に就く。銃身は敵機方向に旋回、向こうの山の眺界線に鳥の大群のような編隊機が西に向かって飛行、我が軍は西日に向かって照準を合わすので大変まぶしい。いよいよ我が陣地に向かって急降下する。我が軍は一齐に発射。初めての対空戦闘です。敵機は機銃掃射を浴びせながら爆弾を投下する。何とも恐ろしいこと、それでも必死の応戦、次々と爆弾を装填しないと、少しでもたつくとその隙に低空で来る。

三十機あるいは五十機くらいが飛んで来る。この島には我々の陣地以外はないから、この陣地を目標にして毎日同じ時間帯に対空戦闘の繰り返しです。戦いが

終われば、必ずどこかが被害を受けるので直ちに応援に行きます。その陣地は必ず戦死一、二名、負傷者数名。この方々の処置等を出来るだけ早くしなければならぬ。少しでも時間があれば機銃の手入れ、銃身が真つ赤に焼けるほど連続発射しているので十分注油して次の戦闘に備えなければなりません。

また、爆撃で破壊された陣地の修理、大きな椰子の木を運んできて応急修理。至近弾が陣地の近くに大穴が開き赤土がむき出しになった所に椰子苗を取って来て植え付ける。夕方になれば戦死者の土葬等々毎日が大変です。早いか遅いか、いつかは私もこの土地に葬られるであろうと思うと深い悲しみを感じました。こんなことをほとんど毎日考えながら対空戦闘を続行していました。

戦局は日ごとに不利になり、昭和十八年九月には連合軍は本島の目前のニュージョージヤ島ムンダに上陸しました。数倍の大きく見える双眼鏡で見ると、山肌は赤土色で樹木など一切見えない。戦車のような機械で作業している（ブルドーザー）。一週間も経てば陣

地は完成、本島に対し砲撃開始です。二〇センチの大砲というのが数門据え付けられ、一斉砲撃ですから小口径の砲や機銃の我が軍では全く手が出ない。ただ防空壕に入り砲撃の止むのを待つばかり、数十分砲撃されると、ジャングルの太木は跡形なく倒れて見るも無残な姿に早替わりです。

午後二時〜三時の間は必ず空爆に来る。これが終わると砲撃開始。こんな状態がしばらく続き、あまりの被害に陸軍の兵隊が夜間斬り込み戦を行うとのことでした。小島から小島へ二〇キロのムンダへ手漕ぎ船で渡るといいますが、全く無謀としか受け取れない。しかし、成功したのか数日間砲撃はなかった。日本軍はすべてをつるはしとスコップで作業するので、何をしても随分時間が必要です。

ある晩、陸軍の兵隊が海軍（我が分隊）に応援を頼むとのこと直ちに全員が海岸に出て行ったら文字通り阿鼻叫喚、まことに哀れな姿です。手・足を切断された者、真っ赤に血に染まった者、「痛い殺してくれ」と叫ぶ者。地獄は見たことはないが、正に地獄かと思

って懸命に救助活動をしながらも、いつかは我々もこんな日が必ず来ると思っていました。

一応の救助作業が終わった後で聞けば、この陸軍は熊本の第六師団でした。高知の歩兵四十四連隊同様、向こう気の強い日本全国に名の知れた兵隊だが、残念ながら数日後に全員玉砕したとの情報がありました。

再び砲撃が始まりましたが、本島では既に砲は、すべて破壊されてしまったということでした。無抵抗のまま壕で時間待ちです。ある日の対空戦で一〇〇メートル離れた陣地が至近弾により被害とのことで、戦闘が終わってから行ってみると死者二名、負傷三名、行方不明一名で、この人は銃身に皮が張り付いていたので、真っ赤に焼けた銃身に肉片が付着したものと判明。夕方戦死者は土葬、この中の一名は香川県高松市出身の杉野一等兵曹でありました。私に大変優しくしてくれた下士官であったので誠に残念、かわいそうでありました。

その晩、三名の負傷者の看護を命ぜられ、衛生兵が一人同行して陣地より遙かな奥地に担架を運んだので

すが、夜道で灯を照らすこともできず、数時間を経てやっと目的地に着きました。やがて夜明けとなりまし

たが、そこに幕舎の小さな医務室があり沢山の患者が集められていました。順次手当を受け、それからまだまだ山の奥地へ進んで行ったがこれからが大変でした。

本隊へ食料を取りに行かねばならないが、全く地形が分からない。ジャングルの奥地のことで距離がどれ程あるか心配です。朝食と昼食は準備、晩と次の朝・昼の三食分を毎日本隊に取りに通うのです。いつ、どこで砲撃されるか不安でいっぱいだ。先任の下士官（長崎県出身）が腹部の負傷で割合に元気があったが、常に私の道中のことを気遣ってくれました。「佐々木が帰って来るまで心配でならん」と常に申されておりました。

この頃、全く知らない古参兵が杖にすがって「佐々木お前は高知だそうだがよろしく頼む」と申された。

恐らく、骨と皮になっている我が身を、近々果てるであろうと意識されての言葉であろうと感じましたが、如何ともできない。食料も余裕は全くなく、他の部隊

の兵隊に分配することはとても不可能で、本当に哀れに思いました。

私の受持ちの患者は日ごとに快方に向かい、やがて本隊へ復帰するようになったが、あの古参兵は多分あの場で最期を遂げたろうと思う。とても歩行できる状態ではなかったからです。後で考えたのですが、あの人は高知出身の人であったように思われてなりません。本隊に帰って、また同じく毎日の対空戦闘、空爆と

砲撃はますます激しくなり、戦死傷者も多く、加えて食糧も不足、ヤシタケを乾燥味噌で煮物を作り、副食として食膳に出すようになったのです。毎日の戦闘で肉体的にも精神的にも相当衰弱している。加えて猛暑と食糧がない。さらにはこの体にマラリア熱。この病気はだれも体験しているが四〇度の高熱、私も最高四〇度七分の高熱で随分体力を消耗しました。

十月のある日、ガダルカナル島に敵の機動部隊が集結、巡洋艦、輸送船三十三隻、十中八九、本島攻撃を加え上陸して来るであろうとの一大事件との情報が入りました。「敵は恐らく艦砲射撃で完全に破壊した上

で上陸すると思うので、各自は覚悟せよ。本島に向かつて来れば友軍機より赤信号、他島へ向かうようなら青信号が投下される」というのである。そこで各々手榴弾一個を渡され「最期まで応戦、駄目という時自決せよ、皇軍兵士として絶対捕虜になるな」という伝達がありました。

青信号であれば今夜中に転進作戦を行うという。我々は南端海岸近くにいたので何の情報もない。いよいよ今夜ここで最期か、二十二歳と十カ月、恐怖の間は長いものです。暗闇になったとき、思わず北の方に手を合わせ、八幡宮や氏神様に心の中でお願いをしました。これは私一人ではなく皆が共通の思いであったことでしょう。

しばらく経って、爆音とともに超低空飛行で海岸に青信号が投下されました。さあ転進だ、高射機銃は使用不能に、菊の御紋章は叩きつぶし完全に不要の兵器となったのです。私はこの日、マラリアの発熱相当の高熱を出していましたが、ここで元気を出さないと捨てられる。加えて兵隊は一番若い。いざ逃げるとなる

と軽機関銃を同年兵と交互に担いでジャングルを北へ北へと逃げました。同年兵は福岡県の松田で頑強な体格をしているので、互いに励まし合いながらの逃避行です。

ジャングルの中は湿気が多く足首まで土にめり込む。同じ所を兵隊が歩くのだから、全く水田の中を歩くようになったが必死の転進作戦です。しかし、だんだんと落伍者が始まりました。自分の体を保持するだけで精いっぱい、とても人を助ける余裕はだれにもない、かわいそうだが仕方がないのです。とに角、今夜中に目的地北端に辿り着かねばならない。昼間は絶対動くことはできないからです。私も夜明け前にやっと着くことができました。

しかし、集結した部隊が敵に見えたら大変、敵機は上空を飛行しています。今晚友軍の艦船が引揚げ作戦を行うとのことだが駆逐艦二十隻と上陸用大発が百五十隻ぐらい来て一挙に引き揚げるといふ。患者は駆逐艦へ元気な者は大発へ乗船することです。しかし、敵機も日本軍が集結していることに気が付いた

のでしよう。十数機の敵機が旋回を始めたと思つたら機銃掃射があちこちで聞こえるようになりました。これは数十分間の出来事であり、私たちは大木の根元で息を殺す思いでじっとしていました。やはり、相当の戦友が最期を遂げたようでした。

暗くなつてきましたが、大発船団が途中で敵機に襲撃され、大分沈没したが、一隻に百五十名ぐらい乗船とのことです。私たちの指揮官は海軍少尉だが全くの鯨詰め状態。私たちの乗船は大分後の方であつたのですが、順次出港でありました。出港して一時間近く経つたころ、前方で曳光弾が交差している。駆逐艦の交戦とのことです。が数キロ離れての交戦故、その弾道の下を通過するとのことです。その後にもまた大変なことが起きました。船底に穴があき浸水を始めたとのこと、速力は落ち、海水が膝下まで浸してきました。友軍に助けを求め大声を張り上げてでも全くの他人事。それもそのはずです。すべての船が定員オーバーなのです。指揮官は、ようやく携行品はすべて投棄せよと命令、私も苦勞した軽機関銃を捨てました。やつと浸水箇所

が発見され、応急処置により沈没は免れましたが、付近に友軍の船は一隻もない。航海は危険というので我々は捨てられたのかもしれない。そこでしばらく様子を見ることとした。朝方、島を発見しいち早く避難、昼間は危険なのでジャングル湾に入り損傷箇所の修理であるが、食物も一切投棄したので何も無い。私も最悪の空腹に備えて家から持つて来た鯨節も捨ててしまいました。避難した島にも何も無い。

一日ぐらいはそれほど空腹は感じなかつたのですが、夕方修復が完全に出来、往路通つた島に立ち寄りながら三日後ブーゲンビル島ブインに帰りました。ところが余り空腹なのでパイヤの未熟な実を食べたのが悪く、その晩から下痢をはじめ一晩中休むことができません、もうこれで終わりかなと思ひました。この島に二日休み、いよいよ本隊のいるラバウルへ引き揚げることとなり、島から島へと渡りやつと松島へ帰り着きました。

ここまで来ればもう大丈夫と言う安堵感いっぱいでありましたが、前線へ出動のとき見送つてくださった

平野兵隊が「オオ、佐々木帰ったか、随分激戦だとの情報は常に聞いていたが、よく生きて帰れたな」と大変喜んでくださいました。全く肉親のようにしてくださり、貴重品である石鹼、襪、タオルをくださった。何も持っていない私にとつてこんな有り難いことはありませんでした。

ここはラバウルの本島より少し離れているので飲料水に不自由するので大型トラックで水をドラム缶輸送です。そのため時間給水だが意地の悪い下士官がいて、時間外に「水をもらつて来い」という。行けば主計科の前任兵長に大きなシャモジでいやと言うほど叩かれることは分かっています。ですからだれ一人として行く者はいない。下士官は立腹して、全員に「前ささえ」を命じられました。焼けた玉石の上に手の平で体を支える。痛さと熱さで汗は流れる。下士官に対し随分憤りを感じたのですが、当時は階級の差は如何いかにもありません。ある兵長が代わりにあやまつてくれて、やつと立てることができました。

私は体調を悪くして我慢していましたけれど、

もう限界で膝が曲がらなくなり受診をしたら、早速入院ということで、ラバウル第八海軍病院へ入れられました。一番若い兵隊だったため、随分無理をさせられたことがこの結果でした。診察の結果は脚気、マラリア、アミーバ赤痢とのことでした。二、三日経つて最後の病院船「氷川丸」に乗船しました。

今晚出港とのことで、患者が相当運ばれて来る。船には赤十字の大きなマークが書かれていましたが、午後大空襲を受けました。陸も海も真つ赤に炎が上がり、湾内の船舶はほとんど被害を受けましたが、日本軍は全く無抵抗です。聞くところによると予想外の超低空飛行なので対空砲火は全く手が出なかつたという。この爆撃は最大の被害だとの情報が流れていました。しかし、病院船には一発の弾も飛んで来なかつたことは敵も国際法を守っているのだなと痛感しました。

その晩、船はラバウルを出港、一路日本へと北上を続けました。夜間は船の内外煌々と輝き、赤十字のマークは一段と冴えて、不安を感じながらも十数日後に横浜入港。続いて伊豆大島、下田の海軍病院に転送さ

れましたが、患者は二千名ぐらいいるとのことでした。しかし、ここへ来て、私は戦病第一種症であるので上等兵に進級しました。若いため治療に専念し、予想外に早く回復退院、陸路佐世保海兵団へ復帰しました。

第一線帰りの兵隊の分隊で、荒々しい兵隊の集まりであったが、私は十分隊の伍長室（事務室）勤務となりましたが、こんな所では寿命が縮むと思い早く転属を願っていました。昭和十九年八月転勤ができました。所は熊本人吉海軍航空隊です。水兵が航空隊へ行くのだがどんな勤務だろうと思いつつ、汽車に乗って熊本へ着いたのですが航空隊は建設中でありました。

私たち転勤者は古い下士官から各自に質問がありました。私は当時七十八キロの体重があり、相撲部隊と銃剣術の助手として配置が決まりました。何分にも七つ釘の予科練の教育隊です。私のような戦地帰りの兵隊がこの二科目を毎日各分隊ごとに教えるのですが、海軍は特攻精神を養うため相撲を大変厳しく教ええました。

しかし、約九カ月でまた転勤。今度は選抜で横須賀

砲術学校入校とのことです。入校後三日くらいで身体検査があり、残念ながら不合格となり、また佐世保海兵団勤務となりました。

またまた、転勤は『海防艦「志賀」に乗組を命ず』ということでしたが、いよいよ来るべき時が来たと思えました。この頃艦船はほとんど撃沈され、日本海軍も大打撃を受けていました。翌日、佐世保の岸壁に行つたところ、駆逐艦を少し小型にしたような艦で、一二センチ高角砲や機銃等、対空戦闘に備えての装備は相当のものでありました。

甲板に整列し、各自の部署は速やかに決まりました。私は後部連双高角砲の左一番の砲手となり、右の一番砲手は幡多郡中村出身の谷本氏で私より若干の後輩でした。射手は班長の西田一等兵曹殿、兵長は松浦、宮城、私の三名で上等兵二名、其の他数名の一等水兵がいて十数名で高角砲の受持ちになりました。

十二ミリ高射砲の弾丸は先に申したようになかなかの重量があり、模様で行うことになっていましたが、志願兵の若い兵隊には相当の負担があつたようです。

腕力を検査すると五回ぐらいで、十回はいません。私は幸い十五回差し上げることができ、艦内では一応名が通っていました。

命令が出て出港、日本海の波は荒く、富山・石川県沖は寒さが一段と厳しい。敵潜水艦は常にこの方面を潜航しているとのことで、いつ魚雷攻撃されるかもしれない。また、対馬海峡を経て朝鮮に数時間上陸したこともありましたが、ほとんど洋上生活でした。敵の魚雷攻撃に対しては特に厳しく、四百メートル以上前方で雷跡を発見、伝声管を通じて報告しないと艦は魚雷をかわすことはできないので、見張り員も大変な緊張が続きます。

時には航空機の攻撃も受ける。老岐の半城浦に仮泊したとき、四十機の敵編隊が発見され、急降下や低空で猛烈な機銃掃射を再三に渡って攻撃され、述べ百機以上にもなりましたので、これが最期かと思いました。爆薬庫から弾薬を揚げるのが間にあわず、機関科や主計科の兵隊の応援により長時間の対空戦闘を行うことができませんでした。この戦闘で二機の撃墜が確認されまし

たが、我が方は全く無傷であったことは幸いでした。そのほか朝鮮鎮海でも空襲を受け、対空戦を行うなどの戦闘を繰り返しながら舞鶴港に寄港、上陸し巡邏隊に選ばれました。

しかし、本艦の最大の任務は日本海での敵潜水艦の掃討です。洋上航行中敵潜水艦を探知し三度爆雷投下攻撃、大量の油が浮いたので撃沈したとし戦果は認められ、呉鎮守府長官豊田副武閣下より感状が授与されました。海防艦の航海は昼間より夜間が多くなり、とりわけ敵潜水艦の掃討作戦は日ごとに重大任務となり、台風之夜も出港したが、七月の台風の晩は本当に怖かった。

強風と高波で艦内の棚の荷物も落下する。前部見張り員は雨具着用するが、波間に突っ込んで行くと滝のような荒波を頭上より被る。こんな恐ろしいことは未経験者には想像がつかないでしょう。

しばらく航海したとき、帰港命令が出ましたが、闇の中に灯が見える、接近すると漂流漁船で助けを求め大声が聞こえる。漁船は木の葉のように揺れていま

したがロープを投げ曳航し、対馬厳原港に上陸させたのですが、エンジン故障の船で、朝鮮人数名を救助することができ幸いでした。対潜航海の間にはカッター練習がありますが、航海の方が気分的には楽でありました。

八月十五日は対馬海峡で迎えました。重大放送があるという。何事かと艦内は静まったら玉音放送がありました。電波障害のため十分聞きとれませんが降伏したことだけは領けました。艦内はただ驚くばかり、しばらくはお互いに顔を見合わせ無言でした。本艦は幾度かの戦闘を行ったが、幸いにして全くの無傷であり、またまた戦いはこれからと覚悟していたので、予期しない敗戦に言葉が出なかつたことは落胆そのものであつたからです。

しかし、目的地朝鮮の東宮には行かねばならない。停泊上陸すると、日本人婦女子が皆泣きながら兵隊の所に来て「敗戦となつた昨夜来、朝鮮人が急に強くなり暴言を吐くは暴れるはで、とても怖くていられぬからこの艦に乗せてください」と頼まれましたが、本当

にかわいそうに思つても如何いかんともしがたい。「一度佐世保に帰港したら引揚げの任務につくと思うのではありません。我慢するよう」と言つて出港しました。今も、あの時の日本人の姿は頭に残っています。

佐世保入港後直ちに私に復員令が出ました。列車は八月の猛暑の中で超満員でした。残された朝鮮の邦人や残務整理で残つた数名の兵隊が早く故郷に帰れることを祈りながらの帰郷でした。十年ぐらい前から、海防艦「志賀」乗組員の戦友会を催しておりますが、「志賀」は海洋博物館として、現在もその面影を残しているとのこと。

敗戦後多くの艦船が各国の賠償となり外国に引き取られている中で、「志賀」一隻が国内に残っていることは強運の艦であると思ひます。同時に艦乗組員も度々の戦闘に生き残れた強運の兵隊でした。